

埼玉県久喜市立江面第二小学校

全員が意見を出し合える ジグソー法で考えを深める

今号の特集でテーマに取り上げたように、言語活動の活性化は多くの学校が課題に挙げている。活動にはさまざまな方法があるが、協調学習の1つの方法として、

「東京大学 大学発教育支援コンソーシアム推進機構」が推奨するのが、「知識構成型ジグソー法」だ（*）。仲間とのかかわりの中で、さまざまな知識を統合して自分なりに答えを導き出すという実践を紹介する。

School Data



埼玉県久喜市立江面第二小学校

◎ 1954(昭和29)年開校。学校教育目標は「進んで学ぶ子、思いやりのある子、健康で明るい子」。1学年1学級の小規模校の特色を生かし、児童一人ひとりに目を向ける指導を心掛けている。校長 関口美重子先生/児童数 64人/学級数 6学級/所在地 〒346-0027 埼玉県久喜市除堀1380 / TEL0480-22-8237 / URL <http://www.kuki-city.ed.jp/ezura2-e/>

「森林がなくなると食べ物がなくなつて、動物が絶滅してしまう』でいいかな」まとめるのは「役割」についてだよ」「じゃあ、こう?」「大事なところは赤字で書こう」これは、久喜市立江面第二小学校6年生の理科の授業でのグループ学習の様子だ。この日は、単元「生物のくらしと環境」の導入として、「森林は、生物が生きる上で、どのような役割を果たしているのだろうか

か」を課題に、「知識構成型ジグソー法（以下、ジグソー法）」による授業を行った。授業の冒頭で、森林伐採の世界状況を説明する映像を見た子どもは、課題に対するその段階での考えをワークシートに書いた。次に、「A 沖縄県山原の赤土流出」「B 生物が絶滅する原因」「C 森林と空気の関係」「D 地球温暖化」の4班に3人ずつ分かれ、班ごとの小課題について調べ学習

を行った。教師が用意したウェブサイトの資料を読み、話し合いながら、小課題の答えを書いていく（写真1）。続いて、A、D班から1人ずつ集まって新たに3つの班を作り、今度は全体課題の答えを出すために話し合った。4人はそれぞれが調べてきたことを説明し、顔を寄せ合い、一生懸命考えて、答えをまとめていく（写真2）。

最後に、3つの班がそれぞれまとめを発表し、それらを聞いた上で一人ひとり自分の考えをワークシートに書く。冒頭では、「生物のすみか」「酸素をつくる役割」など単語の羅列だった考えが、話し合いを経て「森林は僕たち生物に必要な空気、食料などを生み出している。だから、森林のおかげで生き物は生きている」など、論理的な文章になっていった。授業を担当した松本千春先生は、ジグソー法の良さをこう話す。

「みんなが同じ知識を持って1つにまとめるグループ学習とは違い、各人が異なる知識を持つジグソー法では、話し合いが全員の意見を出し合う場になります。更に、課題解決には各知識を統合する必要がある。特定の子どもの意見に引っ張られにくく、多様な意見が出て、課題への理解が深まりやすいと感じています」

異なるピースが話し合いを活性化させる

ジグソー法は協調学習法の1つだ。ある

* 「大学発教育支援コンソーシアム」(CoREF)の「知識構成型ジグソー法」については右記ウェブサイトをご覧ください。<http://coref.u-tokyo.ac.jp/archives/5515>



久喜市立江面第一小学校校長

関口美重子

せきぐち・みえこ 「子どもが夢と希望を育む学校であるために、先生方も笑顔で幸せを感じる学校をつくっていきたい」



久喜市立江面第一小学校

松本千春

まつもと・ちはる 教務主任。「自分から明るく元気なあいさつができ、苦手なことにも積極的にチャレンジする子どもを育てたい」



上/写真1 エキスパート活動では、1班3人で4つの班に分かれ、それぞれの課題について調べ学習を行う 右/写真2 ジグソー活動では、エキスパート活動で得た知識を持ち寄り、課題について話し合う。ホワイトボードに皆で答えをまとめて書いていくが、言葉1つに対して、何がよいか意見を出し合い、練り上げていた



課題について、複数の視点で書かれた資料をグループに分かれて読む「エキスパート活動」、そこで得た知識を交換し、パズルのように統合しながら、課題について学び、考えを深めていく「ジグソー活動」、学級全体でグループの意見交換をする「クロストーク活動」の3つの活動から成る。

松本先生は2013年度、埼玉県教育委員会の研修会で初めてジグソー法を知った時、ジグソー法の学習が可能なのは、学級全体の学力がかなり高い場合に限られるのではないだろうかと思つた。ところが、研修の一環で5年生（現6年生）の理科の授業で実践したところ、普段は目立たな

い子どもが話し合いを引張ったり、それまでのグループ学習ではうなずくだけだった子どもが発言して話の流れが変わったりする場面を目の当たりにし、驚いたという。

「教師が、子どもが考えられる課題を提示し、それに応じた資料を用意すれば、子どもは周りからの刺激を受け、自分たちだけで話し合えるのだと実感しました。固定観念で子どもを見てはいけないことを、改めて突き付けられました」（松本先生）

松本先生の授業を見た5年生の担任が、その効果を感じ、国語と社会でジグソー法での授業を実践した。それらの授業を見た関口美重子校長は、自身がグループ学習に抱いていた課題に対する1つの切り口になるのではないかと思つたと話す。

「私も担任を持つていた時にグループ学習を行いました。資料などから切り取った知識を持ち寄るだけの話し合いになり、理解が不十分な子どもがいても話が進んでしまふことを、課題に感じていました。ところが、自分の調べたことが課題解決の重要なピースになるジグソー法では、それを根拠に補足し、反論するなど、互いの意見を聞き、考えを深め、納得して、自分の意見を持つという姿が見られました」

導入で取り入れ、学習動機に結び付ける

ジグソー法を取り入れる場面は単元の導

入が良いと、松本先生は考える。自分で調べたことで、その後の学習に課題意識を持つと共に、実感を伴って取り組めるからだ。更に、ジグソー法では課題設定と提示する資料が重要になる。今回は、今後展開する「空気、水、食べ物」のキーワードが出るように考えたが、話し合いを活性化させ、本質に気付けるようにするために、わざと遠回りしてアプローチできる課題は何か、何度も練り直した。エキスパート活動で使用する資料も、易しすぎず難しすぎず、適切なものを探すのに時間を掛けたという。

「今日の子どもの様子を見てみると、話し合いの内容にかなり満足しているようでした。話し合いには時間が掛かるというイメージがありますが、単元構成をきちんと計画すればジグソー法の導入は難しくないと考えます。今後は、45分の授業時間内に収まるようにするために、どう工夫していくかを考えていきたいです」（松本先生）

作成した課題や資料、ワークシートは、来年度以降も実践して、同様の成果が見られるのか様子を見ていくつもりだ。

「ジグソー法は、教科の学力に加えて、コミュニケーション能力、課題解決能力、学習の動機付けなど、子どもにさまざまな力が付く学習法だと捉えています。今後も、他教科・他学年の教材作成や授業公開に取り組んでいきたいと思つています」（関口校長）